

江ノ島でさまざまな生物の研究をしながら、東京大学の動物学教授も務めたモースは、三度にわたり延べ二年半、日本で暮らした。そして、日本での生活の中で、日本の人々の暮らしの様子をメモやスケッチに書き留め、しょう細な記録を残している。

今からおよそ百四十年前の日本の人々の姿は、モースの目にどのようなように映っていたのだらうか。かれの残した記録を見てみよう。

モースが日本を訪れてまずおどろいたのは、家屋のつくりだった。どの家にもがんじょうなとびらや仕切りなどない。家の入口にはじょう前もかけられていない。店も住まいも「開けっ放し」で、通りからは家の中の様子が丸見えである。自分たちの国とあまりにもちがう様子に、モースはひどくおどろいた。しかし、日本で暮らし、日本の人々とふれ合う中で、しだいに納得なつとくしていった。

ある時、モースを乗せた人力車が坂道を登っていると、大量の木材を積んだ大八車を男たちがうんうん言いながらおしているところに出くわした。するとすぐさま引き手はモース

大八車が荷物を積み込んだ
が、引いて運ぶ人が
めが二つ付いた
輪の、大車
荷車。

じょう前
とびらや戸に
取り付けて、開
かないようにす
るための金具。

スに断^{ことわ}って人力車を止め、男たちに走り寄^よって、大八車をおすのを手伝い始めた。モースも急いで加わり、かけ声を合わせ、どうにか坂を登り終えた。男たちは口々に「ありがとう」と言いながら、何度も何度もモースに向かって頭を下げた。

またある時、モースは、たい在先^{ざいさき}で、コートをクリーニングに出してきてくれるようにたのんだ。するとしばらくして、たのんだ女性^{じよせい}がもどってきて、「これがコートのポケットに入っていました」と言って、数枚^{すうまい}の小銭^{こぜに}をモースに手わたした。別の時に、同じくポケットに入っていたと言って彼女^{かのじよ}が持って帰ってきたのは、使用済^ずみのサンフランシスコの乗合馬車^{のりあい}の切^{まい}ふ三枚^{まい}だった。

モースの出会った日本の人々はみな「あたりまえの心づかい」のできる人たちだった。

モースは、こんな言葉を残している。

「人々が正直である国にいることは実に気持ちがいい。」

◆「人に置いたままでいいのです」

こんなエピソードもある。モースが広島を旅行していた時のことだ。

ある旅館にたい在^{ざい}していたモースは、何日間か他の地をめぐった後、再び^{ふたたび}この旅館にもどってこようと考えた。そこで、それまでの間、余分^{よぶん}な現金^{げんきん}と金でできた懐中時計^{かいちゆうどけい}を預^{あず}かっておいてくれないかと旅館の主人に願い出た。主人は快くこれ^{これ}を承知^{しょうち}した。しばらくすると、女性^{じよせい}が、うるしぬりの盆^{ぼん}を一つ持ってモースの部屋にやってきた。

乗合馬車客を乗せ、決まった路線を走る馬車。現在の路線もそのような線

うるしぬりの木の器など、木の皮から液をぬるとった。また、水やその器、なすが強くなる。

「お預かりする物を、このお盆ぼんにのせてください。」
とその女性じよせいが言うので、モースが現金げんきんと懐中時計かいちゆうどけいを盆ぼんにのせると、女性じよせいはその盆ぼんをそっとたたみの上に置き、そのまま部屋を出ていった。

（どうしたことだろう、そのまま置いていってしまったが……。金庫が何かに保管ほかんするのではないのか。）

いくら待っても盆ぼんを取りにくる様子がないので、モースは先ほどの女性じよせいを呼び、なぜここに置いたままなのかとたずねた。すると女性じよせいは、「ここに置いたままでもいいのです」と答えた。おどろいたモースは旅館の主人を呼び、再び同じことをたずねた。すると主人もまた、当然のことのように、「ここに置いたままでもいいのです」と答える。

モースの気持ちはゆれた。

（確かに、これまで私わたしが出会った日本人たちはみな、たがいに気持ちよく暮くらしていくために、「きまり」を守り正直に生きていた。しかし、ここは旅館だ。私わたしが留守るすにしている間、旅館の人たちだけでなく他の宿しゆくはく客も、入ろうと思えばいつでもこの部屋に入ることができる。それでも置いたままでもいいじょうぶだというのか。私わたしの常識じようしきでは考えられないが……。）

そんなモースの様子を見て、

「私わたしたちも宿しゆくはく客のみな様も、この品が自分のものでないことはみな分かっています。

あなたがいやな思いをされることは絶対ぜったいにありませんよ。」

主人は笑顔で、そうつけ加えた。



モースの気持ちは定まった。

「分かりました。では、お願いします。」

モースは盆ぼんの上に銀貨と紙へいとで八十ドルという当時としては大金の現金げんきんと金のできた懐中時計かいちゆうどけいを残し、旅館を後にした。

一週間後。

モースは再び旅館にもどり、同じ部屋に通された。

たたみの上の盆ぼんには、銀貨と紙へいと懐中時計かいちゆうどけいとが、モースが出かけた時と寸分すんぶん違わずに置かれていた。

旅館の主人がにっこりと、モースに向かってほほえみかけた。

モースは思い出していた。自分の国のホテルの入口にはってある、さまざまな注意書きや禁止事項じしこうを。水飲み場では、ひしゃくはくさりで取り付けられている。寒暖計かんだんけいはねじでしっかりとかべに留めとられている。どのホテルでも、石けんやタオルがぬすまれないようにさまざまな手段しゅだんがとられている……。

「私の国わたくしの様子を日本の人たちが見たら、どう思うだろう……。」

◆ ビゲローの手紙

アメリカにもどったモースは、動物学の研究を続けながら各地で講演こうえんし、日本の文化や生活のすばらしさをしようかいした。

八十ドルは、
二円。当時の
一円は、現在
のおよそ二万
当たると言わ
る。

そんなある日、モースの元に、友人のビゲローから一通の手紙が届いた。ビゲローは熱心な日本美術の収集家であり、モースが三度めに日本を訪れた時には、いっしょに来日して行動を共にすることも多かった。広島への旅行にも同行している。

ビゲローの手紙には、次のように書かれていた。

「君はいつまで標本いじりばかりしているつもりなんだ。そんなものはどこかへ捨ててしまえ。それよりも大事なものは、かつて君や私が親しみを感じ取りようされたあの日本のすばらしさが、今や消滅しようとしていることだよ。私たちが見た『日本』を、一人でも多くの人に伝えるべきだとは思わないのか。」

モースと同じく日本に心引かれていたビゲローは、自分たちが目にしたことを記録として残すよう、モースに強くせまったのだ。

この手紙を読んで、モースは、日本にたい在していた間に書き留めていたメモやスケッチをまとめ、出版することを決意した。私たちが今、モースの目に映った当時の日本人の生き生きとした姿を知ることができるのは、この一通の手紙のおかげだ。

明治、大正、昭和、そして平成と、時代は移り、モースが初め



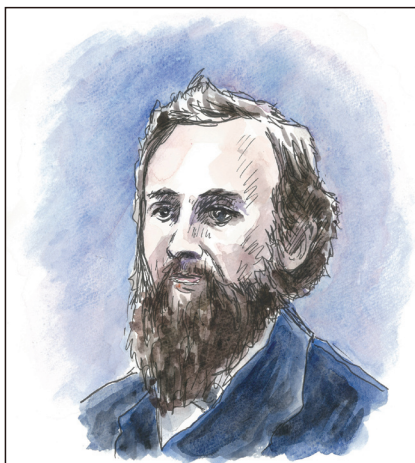
て日本を訪れてから、およそ百四十年の歳月が流れた。

モースが見た日本から百四十年後の今の日本は、モースがこよなく愛した日本の姿をとどめているだろうか。

モースが今の日本を訪れたなら、どのようなメモやスケッチを残すだろう……。

◆ エドワード・シルヴェスター・モース

(一八三八年～一九二五年)



アメリカの動物学者。来日直後に大森貝塚を発見・調査し、日本で初めて縄文式土器を発掘した。「縄文式土器」の名称は、モースが名付けた「cord marked pottery (縄の模様が付いた土器)」を日本語に訳したものである。二千五百冊の学術書を寄贈して東京帝国大学図書館の基礎をつくるなど、日本の高等教育の向上に尽力した。大正十二(一九二三)年の関東大震災で東京帝国大学図書館が壊滅的な被害を受けたことをアメリカの自宅で知ると、「科学関係の全蔵書を東京帝国大学図書館に寄贈する」と遺言を書きかえた。晩年、日本滞在中に書き記した膨大なメモとスケッチをまとめ、『Japan Day by Day (日本その日その日)』と題して出版。八十七歳で没。没後、蔵書は遺言のとおり寄贈され、現在も「モース文庫」として東京大学附属図書館に収蔵されている。

【参考資料】

「日本その日その日」

エドワード・S・モース著

石川欣一訳 講談社

「逝きし世の面影」

渡辺京二著 平凡社



◆ 左はモースのスケッチ
モースが江ノ島で海洋生物の調査をしていたときの作業場。
(講談社「日本その日その日」p.107より)